

光陰似箭

いまどき北京

(東京大学) 代田 智明

2年半ぶりの北京であった。べつに「两会」つまり、政治協商会議と人民代表大会の時期を選んだわけではない。大学の煩瑣な仕事の合間を縫って、出張の5日間を練りだしたら、たまたまぶつかってしまっただけのことである。旅行社に文教地域である市の西側にホテルを依頼して、友誼賓館はと尋ねたところ、たぶん確保は難しいとのことであった。言うまでもなく、「代表」たちの宿舎となっているからだ。

機上の隣人は、なんと日本の某国立大学に4月から通うという中国人院生であった。お喋りのおかげであつという間に到着する。空港は別にとつということはなかった。いまは第3ターミナルが全面的に稼働しているだろうが、そのときは一部しか使われておらず、私の便はいつものターミナルであった。前日の電子メールで、私が到着する夜なら時間があるという北京駐在の友人と面会する予定にしておいた。当然、建国門外にお住まいだが、こちらのホテルの場所を知っていたから、空港から近くで、ふたりの中間になる、燕莎の近くにある「21世紀飯店」のロビーに時間を決めて待ち合わせることにした。ここは中日青年交流センターも併設されて、日本の資金が投入されている三つ星ホテルである。

ほぼ約束の時間近く、空港からのタクシーがホテル敷地の構内に入りかけ、公安の警備員に止められた。やむなくタクシーを近くで降りて、ぶらぶらホテルに歩いていくと、先の警備員がここから先は行けないという。飯か、と聞くから、人に会うのだと言うと、中庭の芝生を避けてぐるっと回って行け、と言う。その通りにぐるっと回っていくと、ホテルの入り口に別の警備員が立ってい

る。人に会いに来たと言うと、それは日本人かと聞くので、そうだと答えると、ここには日本人はいない、いま閉鎖中だという。ぴんと来たので、ああ「两会」の関係ねと言うと、そうだといい、分かっているなら早く行けと態度が言った。

成田で「レンタル料金半額」に惹かれて借りた携帯電話が、こんなにすぐ役立つとは思ってもなかった。友人の携帯番号も伝えられていたからだ。もしレンタルしていなかったら、きっとすれ違ったままだったろう。友人もまた、ぐるっと回らされたあげく、ロビーに入れてもらえずに、うろうろしていたらしい。

近くでドイツ製のビールを飲みながら、まさかこんな格下の所まで貸し切りになるなんてとふたりに苦笑した。それにしても、正門の警備員のぐるっと回らせる指示は、相変わらずとんちんかんだ。陳情者とでも思ったのであろうか。

友人と別れてホテルに着くと、東京で手続きをすませたはずなのに登録にずいぶん手間取った。カウンター越し、パソコンの液晶画面のなかに、パスポート写真となった私の顔が覗いている。「雑費」だとか言われて、あとで戻っては来たが、保証金を800元も取られた。カウンターで待ちぼうけを食わされていると、内側の電話のベルが鳴り、おまえだと受話器を渡された。メールで来訪を知らせてあった友人からである。「明日の昼はどう？ Aさんも誘ってあるよ」。

いつもながらだが、毎度驚くことに、北京のポイントは超高速きわまりない。こちらは北京行きの予定が決まっていたものの、仕事に取り紛れて、なかなか意識が友人には向かなかった。電子メールでかつての知り合い数人に来訪を告げたのは、出立の2日前くらいだったろう。それでも返信が来て、2回分の食事が出立前に埋まった。到着後、予め伝えておいたホテルに電話をくれた旧友もいて、公私を問わず、空いている食事はすべて埋まってしまった。中国でひとり食事をする

のは、味気ないだけでなく、複数の料理を注文するに不便なことは周知であろう。まして情報収集と旧交を温めるのには、このフットワークのよさはありがたいことである。

案内されたレストランはいずこも、まことレストランというべく、中国料理、それも地方の「四川」だとか「広東」だとか看板を掛けているのに、店構えも店内の内装も中国風などではちっともなく、俄然モダンであった。というよりポスト・モダンといった方がいいのか。北京ダックの店は、水商売風のママが取り仕切っていたが、耳元で「うちのは、和風にフランス料理を取り混ぜております」とか囁く。まことヌーボー・シノア。で、3年前は大声で「小姐」（おねえさん）と呼んでいた店員を、客は同じく大声で、いまや正当にも「服务员」と呼び慣わすらしい。むろん「小姐」の値打ちが下落しすぎて、特殊な「服務」（サービス）の女性を指すからであろう。もう一つ。「ヌーボー」の方は当然として、北京の洒落た店は、昔のレストランに比べて味が淡泊になった、と中国人の友人に言ったら、「そうかもね」と否定はしなかった。健康志向もあるとか。むろんあの脂ぎった豪快で粗雑な味が、まったく消えたなんてことは信じられないが。

友人たちとの話題は事欠かない。80年代に愛国主義にしたがって帰国した「英雄的」配偶者のお話、でも彼は優柔不断のおかげで不動産を買うタイミングを失ってしまった「英雄」でもある。愛国主義と不動産。これも「ヌーボー」？それにしても、プライベートな場で、政治談義に盛り上がるのも相変わらずだ。話にそれなりに合わせていると、政府寄りか、そうでないかが、何となく伝わってくる。日本の研究者は、こんなに素朴に政治は語らない。政治はこんなに日常化、主題化していない。これは文化の違いだろうか。

環状線をタクシーで走っていると、建設中のオリンピック競技場が見えてくる。友人が「鳥の

巢」さ、と教えてくれる。北京の街の風景は、3年前とそんなに違っているとは思えない。ただあれはちょっと北京には不似合いだね、と言ったら、タクシーの運ちゃんが、すかさず口を挟んだ。「いや、見苦しいのさ」。いまは北京に3羽の鳥がいる。鳥の巢のほかに、鳥の腿と鳥の卵〔蛋〕だって。腿の方はこれまた建設中のCCTVの新しい建物、これは建国門外の東を通ったときに拝見した。なるほどUの字を逆にしたような変な形の建物である。卵の方は国立大劇場で、これは天安門広場にあるが、今回は残念ながらお目にかかることはできなかった。たぶんドーム型なのだろう。どれも北京市民の悪口のネタである。

ホテルに帰ってTVをつけると、かのCCTVが「人大」の説明をしていて、しきりに3人の農民工代表を紹介し、今回の成果として大々的に取り上げている。政府批判派の友人が言っていた。2000人のうちの3人だけ。でもこの3人は、TVでは政府が民生や福祉に重点を置いていることの象徴のようで、各国メディアの好意的反応としても取り上げられている。これが繰り返し報道されているのを見ると、いじましい思いに駆られないだろうか。いかに農民工が差別的扱いを受けているのか、宣伝しているようなものだ。

北京に来るちょっと前、中国経済の老大家のお話を拝聴した。彼の予想が当たったことはいまだかつてほとんどないと前置きして、2020年代末には中国共産党は失権するだろうと。個人的にはこの予想が当たっては困る。なぜって私がまだ生きている可能性が高く、そうだととんでもない混乱が、東北アジアに出来するから。共産党がどうなろうと構わないが、混乱はご免被りたい。そこで貸し切りにされた先のホテルが思い出された。「人大」にあんなホテルまで動員されたのは、今回はよっぽど大勢の地方の人々を集めたからに違いない。中央の統制力がいかに弱いかを如実に表しているのではないかと。